

「口唇的な要求とは何でしょうか？」（ラカンのセミネール8巻、242頁）。食べ物で養われることの要求は、言語によって媒介され、ひとりの他者に向けられるとたちまち、ひとつの欲求のシンプルな満足以外のものに狙いを定めます。それが小さなひとと<他者>への最初の結びつきを打ち立てます。欲望がやってくるのは、まさに欲求と要求のあいだの隔たりにおいてなのです。

子どもの対象にかんして、フロイトが最初に発見したものは、口唇性に関連しています。たとえば、おしゃぶり（ludeln）は「口を伴って吸うことにあり、それはリズムカルに繰り返され、食物の摂取は目的から除外される」のです（フロイト、3つの性理論）。すでに体験ずみの満足を獲得するための、子どもが創造した工夫が問題になっています。それは、母的な<他者>との、あの「最も過激な結合」（セミネール8巻、243頁）から派生していて、以降繰り返し想起されるものです。舌、くちびる、指、乳首、これらは乳房の代理物ではありません。それは代理的な満足に仕える、諸対象なのです。

ラカンは幼い頃のアンナ・フロイトの夢を喚起します。夢のなかで、アンナは禁じられていた甘いお菓子を見ていたのですが、それは「ある欲求の諸対象の、純粹でシンプルな表象は存在せず、欲望をそそる対象が存在すること」を示したのです。その少女はとくにお腹が空いていたのではなく、食べたいであろうものを夢に見たのです。

食べることを止めない、ガルガンチュアのような子どもについて、ひとは何と言うのでしょうか？彼は満たされることなくがつがつと食べ、数多くの牛をたいらげました。口の快樂—乳を飲む、吸う、軽くかむ、味わう—をどのように解釈すべきでしょうか？世界を探検し、欲望し、ふたたび押しやろうと試みているのでしょうか？

「転換だと私たちが見做していたような、むさぼり喰うことの幻想は、これっぽっちも存在しません」（セミナー 12 巻、134 頁）。そこではむさぼり喰われることの恐れが、現れているのです。ラカンが欲動のリバーシブルな性格を強調しています。食べる、食べられる、自分を食べさせる、これら 3 つは、口唇欲動の 3 つの時間を構成しています。

かくしてヘンゼルとグレーテル（グリム童話）は、美味しそうなパン・デピスの家に惹かれて、躊躇なく食べた結果、「子どもたちを食べる魔女」によって捕らわれてしまいました（ベッテルハイム、「おとぎ話の精神分析」253 頁）。しかし魔女をオーブンに追いやって彼女は炎によってむさぼり喰われることになるという、状況が反転した結末を迎えることとなりました。

それとは反対の極に、食べない子ども、自分に栄養を与えることをやめた子どもが存在します。ときどき、食物の拒絶は、＜他者＞からくるある過剰に対する、リミットとして出現します。自らの欲望を守る、唯一の解決策として現れます。思春期の若者たちの拒食症はそのことを証言していま

す。その場合、対象は食物ではなく、無（le rien）です。ラカンは強調しています。「拒食症において、子どもが食べるもの、それは無です」（セミナー11巻、96頁）。

「パートナーの理論」（ミレー、Quarto77）のなかで、ジャック＝アラン・ミレーは、拒食症は分離に属していて、＜他者＞の拒絶が際立っている一方で、過食症は疎外の側に記載されていて、それは＜他者＞との結びつきが強調されていると提案しています。

「縫い合わされた」口については、どうでしょうか？非常に多くの場合、沈黙が受肉するのは「その満足の上にふたたび閉じる口唇欲動の純粹な瞬間」（ラカン、セミナー11巻、164頁）でない  
とすれば？パロール、言語と、口唇欲動の関係とは、どういうもののでしょうか？

口唇欲動はまた、超自我の大食いにおいても姿を現します。それは貪欲で、満たされることがありません。ラカンにとって、大食いとは「構造的なものであり、文明の効果ではなく、文明における居心地の悪さ（症状）」（ラカン、「テレビジョン」）です。超自我はたんに子どもや親を取り囲むものから来る行動によるものではありません。ポジティブな規律あるいは教育が、喜んで語られていた時代について、思い出すことが大切です。超自我を構造的とみなすことは、罪悪感の問いを他の仕方  
で扱うことを可能にしますし、子どものなかでときおりダメージを与えるような結果をどれくらい生んでいるのかを測ることを可能にしてくれます。

またべつの次元においては、今日、ドラッグへの依存、薬物中毒をどのように扱うべきでしょうか？あるいは、映像とソーシャルネットワークの、あのむさぼり食うような消費については、どう扱うべきでしょうか。

口唇欲動をシニフィアンの体内化によって昇華する、可能な諸形式については、何を言うことができるでしょうか？ラカンは「本を食べる」（セミネール7巻、371頁）という表現—聖ヨハネによる黙示録から借りてきたものです—で、ほのめかしていましたが。子どもに、あまりにもその個人的発達のなかで決定的な、知る欲望、「奇妙な渴望」（ラカン、セミネール7巻、371頁）がやって来るのは、どのようにしてなのでしょうか？

たくさんの方が子どもと思春期の臨床において提示され、節制なく探検されることになります。

怪物シャバリユが思い起こすように、「食べる者は、もはやひとりではありません」（G. アポリネール、「腐りかけの魔術師」、ラカンがセミネール3巻で引用、363頁）。

それでは2027年の3月20日の次回IPE大会で、皆さまとお目にかかります！